

特集 加茂紙



今も加茂に残る 和紙文化と紙漉の技

かみすき



加茂紙は、江戸時代初期（寛永期）以前から加茂市、主に七谷地区で盛んに作られていた和紙のこと。「七谷紙」や「千枚紙」とも呼ばれ、障子紙や傘紙、温床紙、梨袋紙など様々な用途で使われていました。江戸時代には村松藩の御用紙（年貢の代わりに納める紙）として作られ、十八世紀には加茂の紙商人と紙漉き職人の結び付きが一層強くなり加茂紙の名は県下に広がっていきました。



上記写真4点／下大谷田浦家の紙漉（加茂市民俗資料館提供）

加茂紙漉場で

伝統技術を復活

昭和30年代から洋紙の普及により加茂紙の作り手は減少していき、40年代になると、ほぼ姿を消し、平成5年に最後の1軒も事業を終了しました。市では加茂紙づくりの技術が失われてしまう前に、伝統技術の継承と加茂紙づくりに動きだしました。平成24年、商店街の空店舗を改修し、伝統的に使われていた紙漉きの機械や道具を設置。技術の担い手を募り「加茂紙漉場」をオープンしました。



原料も加茂産にこだわって…

楮こうぞとトロロアオイを栽培



加茂農林高等学校で栽培している楮とトロロアオイ

楮が紙の原料に用いられるようになったのは平安時代からといわれ、加茂紙づくりに欠かれません。きれいな山水が豊富に流れる七谷地区には、その昔、楮とトロロアオイ（つなぎ）が多く自生していました。現在は、冬鳥越スキーガーデン（七谷）の一面と加茂農林高等学校で栽培しています。今も地元産の材料を使って加茂紙が作られているのです。



刈り取り後の楮